

新学習指導要領の実践を考える①

高齢者の介護の基礎

新しい学習指導要領では、少子高齢社会の進展に対応して、家庭生活と地域との関わりの中で、高齢者に関する内容が新設されています。

高齢者との関わり方では、中学生とは違う高齢者の一般的な身体の特徴を理解させながら、それらを踏まえた関わり方についても学習することになります。介護については、立ち上がりや歩行などの基礎的な介助の方法を取り上げ、体験的な活動を通して「高齢者の介護の基礎」を理解できるようにすることが求められています。

本冊子では、2021年度からの完全実施に向けて高齢者の介護の基礎について、どのような実践ができるか、紹介します。



1 学習指導要領での記載

A ア (イ)

家庭生活は地域との相互の関わりで成り立っていることが分かり、高齢者など地域の人々と協働する必要があることや介護など高齢者との関わり方について理解すること。

介護など高齢者との関わり方については、視力や聴力、筋力の低下など中学生とは異なる高齢者の身体の特徴が分かり、それらを踏まえて関わる必要があることを理解できるようにします。また、介護については、家庭や地域で高齢者と関わり協働するために必要な学習内容として、立ち上がりや歩行などの介助の方法について扱い、理解できるようにします。この学習は、高等学校家庭科における高齢者の介護に関する学習につなげるようにします。

指導にあたっては、介護の基礎に関する体験的な活動を通して、実感を伴って理解できるよう配慮します。例えば、生徒がペアを組み、立ち上がりや歩行などの介助を体験し、介助する側とされる側の気持ちや必要な配慮について話し合うなどの活動が考えられます。また、高齢者の介護の専門家などから介助の仕方について話を聞くなどの活動も考えられます。さらに、他教科等の学習における体験と関連付けることも考えられます。

2 考えられる実践

①生徒がペアをくみ介助を体験

白内障用ゴーグルや左右違った足首の重りなどをつけ、高齢者になった自分を体験し、高齢者の身体の特徴を理解する。また、二人組で介助する側とされる側に分かれ、実際に介助される側が座り、立ち上がる介助をもう一人が行うようにする。このような体験から、介助する側とされる側の気持ちや必要な配慮について話し合う。

高齢者疑似体験



装具を身につけることにより、80歳程度になった自分を体験する。

立ち上がり介助



介助する人は、介助される人の手を握って、介助される人はおじぎをするようにしてお尻を浮かせる。

②専門家から介助の仕方について話を聞く

高齢者介護施設で働く方を講師として、介助のポイントなどを教えてもらう。施設に訪問すると、実際に高齢者の方とかかわり、介助の体験をさせていただくこともある。

次ページでは②の実践例を紹介します。→

「高齢者との寄り添い方を考えよう」

～新学習指導要領“介護疑似体験”に向けて～

京都府立洛北高等学校 教諭 竝川 幸子

1 はじめに

本校は中高一貫校のため、附属中学校の「技術家庭家庭分野」も含めて私が担当していることを、まずはお知らせしておきたい。

中学校「技術・家庭 家庭分野」において、新学習指導要領で「介護疑似体験」について新たに記されている。令和3年度からの完全実施に向けて、どの題材において、どのような体験活動を考えればよいのか、常に意識してきた課題であった。

そんな中、閃いたのが、昨年度高等学校必修科目「家庭基礎 高齢期の生活」のなかで、社会福祉施設の方々と取り組んだ講義及び実践内容であった。この連携を生かし中学生の体験学習へ繋げることを考えた。

今回、中学生の介護疑似体験に関する、その新たな1年目の取り組み内容について報告したい。

*

介護疑似体験とは、具体的には新学習指導要領【A 家族・家庭生活】(3)「家族・家庭や地域との関わり」で、「高齢者など地域の人々との協働、高齢者との関わり方」として新設された内容である。高齢者の身体的特徴や高齢者の介護の基礎に関する体験的な活動を授業のなかに組み入れるというものである。

昨年度高校生の高齢者に関わる授業のなかで講義等を依頼した施設職員の方との連携を生かし、今年度9月10日・17日に交流・体験できることになった。

講話だけでは経験できない高齢者との交流や簡単な介護など、高齢者と共に行動することを通して、生活上のさまざまな事柄について気付き、そこから学び、今後どのように行動すればよいのか、高齢者への寄り添い方について考え、実践へと繋がられる心と行動力を育みたいと考えた。

2 中学校2年生「介護疑似体験」について

(1) 指導計画

【家族・家庭生活と子どもの成長】の「私たちと家族・家庭と地域」の題材は、次のように計画した。

- ・家庭と家族関係 3時間
- ・家庭生活と地域 2時間
- ・介護疑似体験 2時間
(事前学習 0.5時間 体験 1時間 事後学習 0.5時間)
- ・災害への備え 1時間

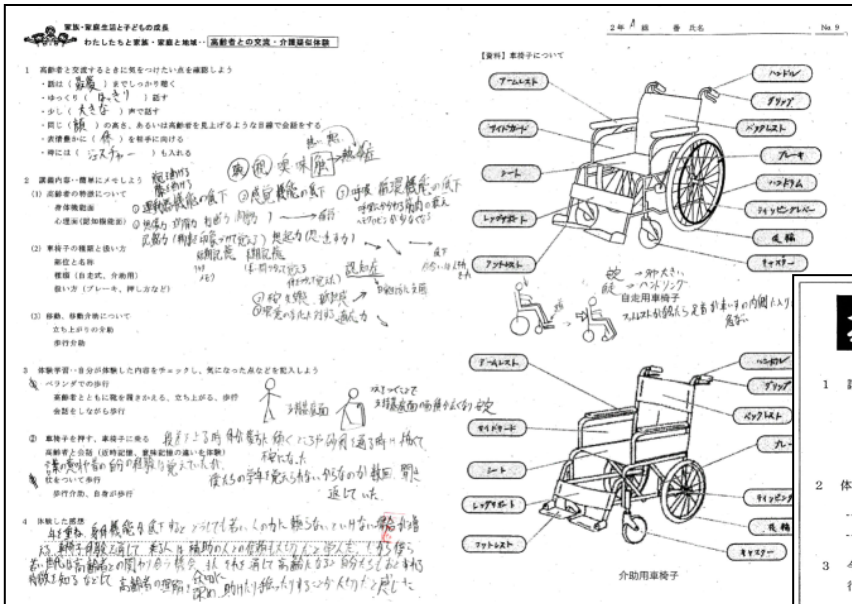
(2) 体験学習を進めるうえでの配慮事項

- ・高齢者との交流上における注意事項や体験のグループ分け等について、事前学習を実施。
- ・昼休みに体操服に更衣後、移動を速やかに行えるよう、委員会活動等は実施しないことを学年に要請。
- ・昼食を済ませ、午後1時に校門に集合。1時15分には講義が開始できるよう揃って徒歩で移動。
- ・午後2時5分には講義を終了し、揃って徒歩で帰校。
- ・時間の関係上、6限目(午後2時25分～)は体操服で授業を受けることを授業担当者等に承諾を得る。

(3) 授業(50分)の展開

- ① 日時・対象：
令和元年9月10日(火)5限目 2年生A組40名
令和元年9月17日(火)5限目 2年生B組40名
- ② 場所：北山ふれあいセンター(本校から徒歩10分程度)
- ③ 題材名：「高齢者との交流と介護疑似体験」
- ④ 題材設定の理由：高齢者の心身の特徴について理解するとともに、高齢者との関わり方などについて理解を深める。
- ⑤ 本時の学習：
 - i 本時の題材名：「高齢者との寄り添い方について考えてみよう～交流と介護疑似体験～」
 - ii 本時の目標：高齢者の心身の特徴について知るとともに、交流を通して関わり方などについて考え理解を深める。
- ⑥ 評価規準：高齢者の心身の特徴について理解するとともに、積極的に高齢者と交流し、関わり方などについて考え、工夫することができる。【関心 意欲 態度】
- ⑦ 展開案(略案)：クラスを2グループに分け、前後半で講義・体験学習を交代する
講義は20名一斉に、体験は20名を①～③のグループに分け、ひとつを20分間体験(略案は末ページ)
- ⑧ ワークシート・アンケート：作成したものを、講義を依頼する施設管理者や施設長も確認した。

次ページに掲載するワークシート・アンケート(図1)は、生徒が記入したものである。



※アンケートは生徒の変容が分かるような設問にした

図1 ワークシート・アンケート

3 体験と考察・感想 アンケートに生徒が記した代表的意見

○講義や体験を通して、あなたたち中学生と高齢者の違いが理解できましたか。

- ・椅子に座り、立ち上がるだけなのにこんなにも大変で、同じ動作をするのに何倍もの時間がかかるのだと知りました。
- ・話し方など、大きな違いはなかったものの、学年を何度か聞かれるなど、所々記憶力の低下を感じました。

○体験してみて、どのようなことを感じ、考えましたか。

歩く

- ・高齢の方は前方にこけやすいので、高齢の方と歩くときはいつも自分の方の斜め前を歩こうと思いました。



一緒に歩き、歩調や足元に注意

車いす

- ・僕たちは、足が動くから乗り降りするのは簡単だけど、足の不自由な方はそれも難しいし、手しか使えないから大変だと思いました。あと、結構怖かったです。
- ・砂利の上を車いすを押して歩きましたが、ものすごく歩きにくく進まなかったのので、バリアフリーが充実すればよいと思いました。



自分で動かし、カーブを曲がる

杖

- ・杖について歩いたり、補助したりしましたが、高齢の方が転ばないかとても緊張しました。
- ・高齢になると、様々な面の機能が低下が起こりますが、それを理解し、助け合うことが必要だと感じました。



杖の種類と特徴について説明 杖をついた方への配慮について説明

○今回の体験等を通して、生活のなかで何かに生かすことはできそうですか。行動に繋がられるようなことはありますか。

- ・自分の祖父母に対して、もっと気遣い、はっきり大きな声で話したり、段差に苦戦している方を見かけたら車いすの操縦をサポートしたりしたいと思います。

4 「高齢者との交流と介護疑似体験」を終えて …まとめと来年度に向けた課題

「祖父母に接するとき、耳が聞こえないことが多く、何度も同じことを言うので、つい面倒くさくなりますが、もっとゆっくり大きな声で話そうと思いました。」 「相手のことを一番に考えて行動することが、介護では大切だとわかりました。」という生徒の声に代表されるように、自分の祖父母への労りの気持ちや、バスや電車で高齢者を見かけたら積極的に席を譲るなど、少しずつでも行動へ移すことができるのではないかと期待する。

思春期の生徒は、ある意味「はにかみや」「てれや」である。席を譲りたいと思ってもなんだか照れくさ



段差(ブロック)を乗り越える



砂利の上を車椅子で移動する

い・そんな生徒の肩をぽんと後ろから押してあげたい、これも今回体験授業を行いたいと思った動機である。今年度、手探り状態で初めて取り組んだ高齢者との交流と介護疑似体験であったが、施設職員や高齢者の方々の協力により、本題材のねらいは達成できたのではないかと考える。

来年度に向けて既に検討を進めているが、「2時間連続の体験授業」とし、施設までの往復時間や体験学習の内容を振り返る時間もその中に組み込みたいと考えている。時間的なゆとりができれば、生徒全員が

高齢者とゆっくり交流したり、杖を使って歩行したりすることなど体験内容も増やすことができる。また、講義に集中できるようワークシートも改善したいと考えている。本体験に協力くださった施設職員や高齢者の方々に感謝するとともに、更にこの体験学習が充実し、生徒の心豊かな生活に繋がるように、引き続き研究していきたいと考える。

*本事例の詳細版は web ページ (<https://www.kairyudo.co.>) に掲載しています。

展開案 (略案)

過程	指導内容	指導形態	主な学習活動	指導上の留意点	教材・教具等
導入 6分	・本時の学習目標及び内容の説明 ・講師及び施設の紹介	一斉	・本時の学習内容を確認する。 ・学習内容を思い出す。 ・活動場所等を確認する。	・学習目標を知らせる。 ・前回授業の学習内容を振り返らせる。 ・前後半の交代を確認する。	・ワークシート ・アンケート ・代表者挨拶
展開 (講義 20分)	・高齢者の特徴について 身体機能面 心理面(認知機能面) ・車いすの種類と扱い方 部位と名称/自走式、介助用/扱い方(ブレーキ、押し方等) ・移動、移動介助について 立ち上がりの介助/歩行介助 ・質疑応答	一斉	・高齢者の特徴について、祖父母や近隣の方を思い出す。 ・認知症について認識する。(ワークシート記入) ・車椅子の必要性について考える。 ・車椅子の種類などについて認識する。 ・使用方法を確認する。 ・立ち上がる時や歩行するときの介助方法を認識する。	・他人事にならないよう、身近な人を例に考えさせる。 ・認知症らしき人が困っている時、どんなことができるか考えさせる。 ・高齢者だけが、車椅子を必要とするのではないことを確認する。 ・車椅子を押す(介助する)人との信頼関係が必要なことを認識させる。 ・高齢者に寄り添う気持ちで介助することを考えさせる。	・講義者 1名 ・車椅子 2台 自走式、介助用
	①ホールでの歩行 靴を履きかえる/立ち上がる・歩行する/会話をしながら歩行 ②車椅子の体験 車椅子を押す、乗る/会話をする ③杖について歩行 歩行介助/自身が歩行/会話をしながら歩行	グループ ① グループ ② グループ ③	・学習内容を確認する。 ・高齢者とともに動作を行う。 ・ペースを合わせ、行動する。 ・会話をしながら歩行する。 次の3点をローテーションでグループ毎に体験する。 ①車椅子でカーブをまわる。 ②車椅子で段差を乗り越える。 ③車椅子で砂利道を進む。 今朝の朝食献立、旅行、仕事などについて尋ねる。 ・杖の使い方を確認する。 ・歩行のスピードなどを認識する。 ・荷物を持ち、杖で歩行するなど、場面を想定させる。	・疑問点等の質問を促す。 ・危険のないよう注意を払う。 ・高齢者に寄り添うとはどういうことか確認する。 ・日頃の歩行との違いを確認させる。(段差含む) ・体験後、高齢者と会話する ・近時記憶、意味記憶の相違を認識させる。 ・電車やバス、街中などでの高齢者への配慮を行動に移せるよう認識させる。 ・会話をしつつ歩いた際の高齢者の様子を観察させる。	・指導者 1名 ・ポール ・指導者 1名 ・車いす 3台 ・ポール ・ブロック ・砂利 ・指導者 1名 ・杖 3種
まとめ 4分	・高齢者への配慮についてまとめる ・挨拶		・高齢者への配慮が、生命を敬うことにつながることを考える。 ・感謝の心をもって挨拶をする。	・日頃から認識し、行動に繋げる大切さについて確認する。 ・帰路での注意を確認する。	



開隆堂出版株式会社

本社: 〒113-8608 東京都文京区向丘 1-13-1
支社: 北海道・東北・名古屋・大阪・九州

[ご注文・お問い合わせ]
TEL: 03(5684)6118(販売) / FAX: 03(5684)6155
●発行物のご案内は Web ページをご覧ください。
<http://www.kairyudo.co.jp/>